
魔法少女リリカルなのは ~ Disorted Story ~

アーチャー【狼】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはDisorted Story

【Nコード】

N8221Z

【作者名】

アーチャー【狼】

【あらすじ】

.....それは、一つのおとぎ話。

理不尽な理由で死んだ少年が交わった、魔法少女達の物語。

正史（A・s）より分岐したもう一つの正史（A・s The Battle of ACE）。

さらにそこから分岐した、イレギュラーな世界。

終わりから始まった”彼”は、この世界でどのようにして生きるのか？

今ここに、”異物”を混ぜた出会いと別れの物語が紡がれる。

それは、とてもおおきな、とてもちいさな、おとぎばなし。

でも、だれもしらないものがたり。

- - - - 魔法少女リリカルなのは Disorted Stor
y } - - - -

- - - - 始まります。

OPテーマ：魔法少女リリカルなのはStrikersOPテーマ
より、「MASSIVE WONDERS」

プロローグ「終わりの始まり」(前書き)

性懲りもなく投稿。

短文+駄文ですがよろしくです！by作者

プロローグ「終わりの始まり」

――――終わりと始まりは、余りにも理不尽な出来事からだった。

人の生き死には、その時々 of 出来事によって簡単に決まる。

そして、人の人生つてのは結局死ぬのが遅いか早いかの違いだ。

どんなに人生失敗したって、長生きするヤツは長生きするし、どんなに人生成功したって、早死にするやつはすぐに死ぬ。

そんな、世界に70億もいる人間の中の一人である自分の終わりは、唐突に訪れた。

雪の降るある日だった。

自分の死因は事故死だったみたいだ。

交差点で、横断歩道を渡ろうとして、同じ横断歩道を渡っていた女の子めがけて信号無視で突っ込んできたトラックに、女の子庇って撥ねられた。

単純に運が悪かったんだろう。

痛みは一瞬だと、誰かが言っていたがその通りだった。

気づいた時には地面に這いつくばって、体に感覚はなかった。

その代わり、ものすごく寒かったのを覚えている。

意識が暗くなつていく度に、寒くなつていく。

それだけが、死ぬ直前に怖いと思ったことだった。――

――

「……………っ!!」

飛び起きる。

恐怖と同時に意識が暗闇に呑み込まれるのと、意識が覚醒したのはほぼ同時だった。

「はぁ……………!はぁ……………!」

明らかに矛盾した状況。

荒くなる息遣いを整えようと俺は息を必死に吸ったり吐いたりを繰り返す。

「目が覚めた、少年？」

死んだはずの俺が、はつきりと意識を持って今ここにいる。
そんな矛盾した状況に戸惑っている俺の耳に、聞き覚えのない女性
の声が聞こえた。

「……………ここ、は…………？」

某決戦兵器のパイロットの気分はこんな感じだったのだろうか？
落ち着きを取り戻した俺の視界に広がったのは、四方八方が真っ白
な部屋だった。

この部屋にあるのは、自分が横たわるベットと……………

「目、覚めた？」

その横にある椅子に座る、金髪の女の人だった。

「……………どういう、ことだ？何がどうなってる…………？」

戸惑いを隠せない表情で疑問を口にする俺に、女性は笑みを俺へ向
けながら立ち上がる。

「面白いくらいに戸惑ってるわね。」

妖艶に微笑む彼女は、そう言いながら俺へ端的にこう告げた。

「ここは、あなた達でいう”あの世”よ。」

半ば予想していた言葉。

……………まあ、あれだけの思いをしたんだ。生きてる方がおかしいだ
ろっ。

「……………それじゃあ、あんたはさしずめ”閻魔様”か？」

苦笑しながら聞く俺に、女の人も苦笑しながら答える。

「残念。あの人はこの管轄じゃないわ。第一、彼はこんなに美人じゃないし、人間でいう所の”男”よ？」

くすくすと笑い声を漏らす。

「それじゃあ、あんたは誰なんだ？天使かなにかか？それともこいつはドツキリか？」

女性の格好……………かなりきわどい、どこかのファンタジー漫画かゲームか小説に登場してくる天使のような服装を見ながら、呆れ口調で言う。

「それも外れ。紛れもなくここは”あの世”だし……………私は天使の上位存在、”神様”よ？」

その俺に、しれっとした様子で軽く神様宣言する女性。

……………ん？神様？

「……………なんの冗談だよ……………それで、神様が死んだ俺に何の御用でしようか？」

なんだ？最近の”あの世”ってのは天国か地獄に行く前に神様が就職通知みたいにわざわざどこいくか伝えにくんのか？

「それなんだけどね……………」

と、自称神様が突然頭を抱え始めた。

「……………何かあったのか……………?というか、俺が死んだってことに問題でもあったのか……………?」

次の瞬間、女性の口からでた言葉は予想通りのことであり、同時に苛立ちが隠せなくなるほど納得できないものだった。

「あなたが死んだの、あれ、私たちの手違いなのよ。」

「……………はぁ!?!」

素つ頓狂な声をあげた俺に、自称神様は「いやぁごめんごめん」「みたいな対応をする。

……………適当なおい。あの世ってか、神様とか天使とか云々全て適当なおい。

「……………それで?手違いだとどうなるんですか俺。」

まあ、それだったら無理矢理にでも生き返らせたりさせてくれるんだろうと思っただが……………

「ちなみに、あなた本来の世界に生き返ることはできないわよ。」

やはりというか、回答はその通りだった。

「そして、貴方はまだ死んじゃいけないのに死んでしまった身。」

「だから?」

「死後の世界にあなたを招き入れることはできない。」

彼女は、そう俺へ告げた。

「ふざけんな!!」

その時俺は、何時の間にか怒気を含んだ口調で怒鳴り声をあげていた。

「あんたたちが生き死に決めてるのは百歩譲っていいとしよう!だが、それが簡単に”手違い”とかミス起こしていいのかよ!??」

「まあまずは落ち着いて、ね?」

「これが落ち着いていられるか!!」

「ただ、あなたが絶対に”生き返れない”とは言っていないわ。」

「今生き返れないって言ったろう……」

「落ち着けって言ってんでしょ!!」

”パシンッ”

乾いた音が耳元で響く。

その音が、俺が頬をはたかれた音だというのを認識するのに数秒をようした。

「……………」

俺は無言で彼女を睨みつける。

「……………私だって、こんな事は言いたかないわよ……………」

顔を俯かせて、消え入りそうな声で何かを呟くがすぐに顔をあげて彼女は俺へ言う。

「落ち着いた？じゃあ、冷静によく聞きなさい。」

「……………」

「貴方には、今から”ある世界”に行ってもらおうわ。その世界は、ある世界から分岐した世界の一つで、最も世界が滅ぶ可能性の高い世界。」

凜とした瞳で俺を見据えて彼女は告げる。

「あなた、その世界にいつて世界を救ってきて頂戴。それが、貴方のがあの世へ正式にいけるように二度目の生を与えてあげられる条件。」

「……………俺に拒否権は？」

「ないわ。これは私たちの決定。あなたに何も言う権利はない。」

俺の意見を真っ向から一刀両断する自称神様である彼女の言葉。

「それだけの”力”は与えてあげる。でも、もしもその世界を救えなかつたら……………」

「救えなかったら？」

「……あなたという存在そのものがあらゆる世界から抹消されるわ。わかる？あなたが”なかったこと”にされるの。」

あまりにも理不尽な事。

結局、俺自身は無力ってことか。

「理解したかしら？」

「……ああ、理解したよ。」

納得いくか、そんなこと。

理不尽に理不尽重ねられて、はいそうですかって引き下がるヤツがどこにいる？

「なら行きなさい。せめて祈ってあげる。」

目の前に白い扉が現れる。

「”あなたの人生に幸あれ”とね。」

俺はそれを、無言で開け放った……

「行つたわね……………」

私は、彼が去るのを見届けてから自嘲気味な笑みを浮かべて息をついた。

彼の表情を見て、少しばかり傷ついたのは秘密だ。

彼の”消去”は上の命令だった。

上の決定は絶対。

上の決定、それは……………”彼”の存在抹消。

かつて、人間界に奇跡をおこした”人間”がいた。

私という存在と関わつたのを理由に奇跡をおこした。

彼は、その人間の末裔。

同時に彼は、日本という国の一般家庭に生まれたごく普通の少年だった。

先祖返り。

遙か遠い昔の、失われた筈の力を持つてしまった彼は、生まれた瞬間から世界にとって”異常”な存在だった。

だから、彼が覚醒する前に上は彼の排除を決定した。

でも……………私はそんな事は納得できなかった。

情が移つたのだろうか？

自分の、今はもういない息子と似た彼を。

……………自分の血を引いてしまっている、息子も同然のあの子に。

だから、上の影響が及ぶまえに強制的に殺して別世界へ送るという
ややこしい事もした。

外見も、何もかもをその時に変えた。

だから、彼が”彼”だと気づかれるまでは相当時間がかかる筈。
力もあげた。あとは、彼が刺客を退けてくれさえすればいい。

” バアン!! ”

「ここにいたか……………」

部屋のドアが勢いよく開かれた。

現れたのは、美しい容姿の青年だ。

「アテナ”。君をこれより拘束する。これは、上の命令だ。」

「……………」

彼女は……………この瞬間、反逆者の烙印を押された”アテナ”は、
儂げな笑みを浮かべてこう答えた。

「……………嫌よ。」

物語は紡がれる。

イレギュラーを交えて。

始まりの物語、悲しみと出会いと別れの物語は終わり、正史になか
ったもう一つの戦いに突入した世界に、”彼”は舞い降りる。

”魔法少女”達が戦う世界に……………。

未来はあり得ぬ形。

それは、”極めて近く、限りなく遠い世界”であるがゆえに。

- - - - 魔法少女リリカルなのは } Disorted Stor
y } - - - -

始まります。

プロローグ「終わりの始まり」

推奨ED：境界線上のホライゾンEDテーマ「Ceui/Star
dust Melodia」

プロローグ「終わりの始まり」(後書き)

感想、意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8221z/>

魔法少女リリカルなのは～Disorted Story～

2011年12月26日01時47分発行